白川町国際友好協会だより

あくしゅ

2026.5　特別号

― 友好協会設立 40 周年記念特別号 ―

▲国際交流フードフェスを開催！

協会設立 40 周年記念式典にあわせて開催された「国際交流フードフェス」では、町内企業と協力し、町内在住の外国籍の方々が自国の伝統料理を振る舞いました。

◀満蒙開拓平和祈念館を訪問

白川町国際友好協会の会員 27 名で、長野県阿智村の「満蒙開拓平和祈念館」を訪れました。今回の研修を通じて、会員同士の親睦を深めるとともに、歴史への理解をより一層深めました。

協会発足 40 周年特別号発刊にあたって

白川町国際友好協会会長　鈴　木　寿　一

白川町国際友好協会は、昭和 60 年 7 月に「白川町・ピストイア市友好協会」として誕生し、イタリア・ピストイア市との交流を礎に歩みはじめ、平成 7 年に協会の名称を「白川町国際友好協会」と改め、今年で 40 周年という大きな節目を迎えましたことを、会員の皆様そして町民の皆様と共に心よりお慶び申し上げます。

また、長年にわたり本協会の活動を温かく支えていただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

思えば昭和、平成、令和と時代が移り変わる中、当協会はイタリア・ピストイア市との交流を始め、スペインサラマンカ市、中国松原市などとの交流の輪を広げてまいりました。また、町内には技能実習生を含め 170 名余の外国人の皆さんが生活されており、これらの方々との繋がりも大切にし、草の根活動にも取り組み地域に根差した国際交流の輪をさらに広げてまいりたいと考えています。

また、未来の白川町を担う若者たちが国際的な視野を持ち、世界で活躍できるような支援も行っていきたいと思います。

40 年前と比べ現在はＳＮＳ等を通じて世界がより身近になりましたが、原点は人と人が出会い、互いを知り、尊重し合うことにあり「心の通った交流」の重要性はこれまで以上に増していると感じております。

この特別号は、私たちが歩んできた 40 年の足跡を記録した一冊です。これまでの貴重な経験を次世代へと引き継ぎ、白川町がより開かれた多文化共生の豊かな町であり続けられるよう今後も努力を重ねてまいりたいと思います。

結びに皆様の益々のご多幸を祈念いたしまして、あいさつといたします。

積み重ねた歴史が新たな先へ

白川町長　佐　伯　正　貴

白川町国際友好協会が発足 40 周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

今日まで、長きにわたり活動を続けてこられましたこと、貴協会に関わっていただきました皆様方のご尽力あってのことと深く感謝申し上げます。

貴協会は、イタリア・ピストイア市との交流を契機として、昭和 60 年に「白川町ピストイア市友好協会」として発足し、平成 7 年から現在の形になっております。

私は、昭和 59 年に町職員として奉職しましたので、共に歩んだ 40 年であった気がいたします。

当時は、町の施策も国際交流にちなんだものが多く、町のイメージキャラクターとして「ピノキオ」を作成、施設の名称にも「クオーレの里」「道の駅ピアチェーレ」「野菜村チャオ」などイタリア語を冠したものとしてまいりました。

この国際交流のきっかけを作っていただいた「故　辻宏氏」の功績は、筆舌に尽くしがたいものがございますが、中でも皇室とのつながりをいただいたことは町民にとっても貴重なことであったと思います。平成 5 年には、上皇陛下、上皇后陛下が、また平成 14 年には、当時の紀宮様がピストイア市を訪問されました。小さな町の白川町で、そのような思いを持っていただいたこと、誠にありがたいことであり、ありえないことでもありました。

時代は流れ、交流の方法も変わってまいりました。中国松原市との交流も情勢の変化により途絶えておりますが、特にコロナ禍ではお互いの行き来も制限され、交流自体が難しい状態となりました。

町内にも大勢の外国人の方が住んでおられます。このような時代を迎え、国際交流を主体として活動いただいてきました内容も、時代に即したものに変えていく必要があろうかと感じます。

町の人口も減少し、子どもたちも少なくなっています。将来を担う子どもたちに、これから加速する国際社会で活躍できるよう、応援できる体制を整えていきたいと考えますので、今後とも白川町国際友好協会のご理解ご協力をお願いし、あわせて益々のご発展と、関係者の皆様のご健勝を祈念し、お祝いの言葉といたします。

世界とつながる 40 年の歩み

白川町議会議長　田　口　守　也

白川町国際友好協会が発足 40 周年の大きな節目を迎えられましたことに、町議会を代表し、心からお祝いを申し上げます。

貴協会は、昭和 60 年の設立以来、町民と世界を結ぶ架け橋として、本町における国際交流の輪を着実に広げてこられました。その原点には、世界的なオルガン建造家である故辻宏氏の存在と、音楽を通じて人と人、地域と地域を結びたいという熱い思いがありました。こうした志に共鳴した多くの先人や関係者の皆さまのご尽力により、交流は一過性のものではなく、本町に根づいた取り組みとして発展し、今日まで受け継がれてきました。

40 年の歩みを振り返りますと、海外から多くの方々を迎え入れるとともに、青少年派遣や留学などを通じて、町の若者が世界に触れ、視野を広げる貴重な機会が数多く生み出されてきました。異なる文化や価値観に出会う体験は、人としての成長を促すとともに、白川町の未来を担う人材育成にも大きく寄与してきたものと感じております。

近年、グローバル化が急速に進み、国際社会との関わりは、より身近で重要なものとなっています。そうした中、40 周年を記念して創設された「辻宏記念奨学金」は、次世代を担う若者が世界へ羽ばたくための大きな後押しとなり、協会の精神が未来へと確かに引き継がれていく象徴的な取り組みであります。

国際交流は、言葉や文化の違いを超えて、互いを理解し、尊重し合う心を育む営みです。白川町国際友好協会が、これからも本町における世界とつながる窓口として、その役割を果たし続けられることを大いに期待しております。町議会といたしましても、協会の皆さまと力を合わせ、その活動を支えてまいります。

結びに、白川町国際友好協会のさらなる発展と、関係されるすべての皆さまのご健勝を心より祈念申し上げます。

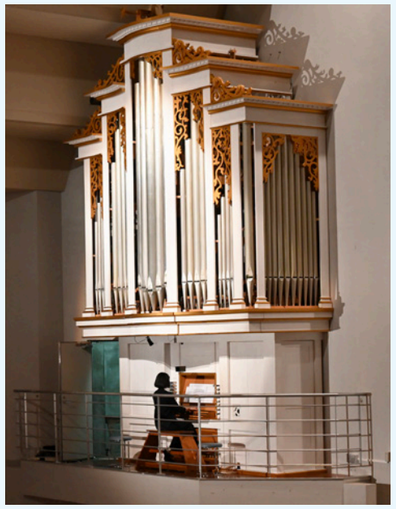
白川町国際友好協会設立 40 周年

設立40周年記念式典

令和 7 年 9 月 20 日、「白川町国際友好協会設立 40 周年記念式典」が開催されました。

式典では、永年役員への感謝状贈呈やパイプオルガンの演奏、世界的なオルガン建造家である故・辻宏氏の功績を振り返るトークセッションが行われました。最後に、白川町国際友好協会留学奨学金「辻宏記念奨学金」の創設が発表されました。

設立当初から 40 年の長きにわたり役員を務められ、永年役員への感謝状贈呈で代表受領を務めた安江健一さん



荘厳な音色で会場を魅了した、岡崎まゆりさんによるパイプオルガン演奏

金澤正剛さんと辻めぐみさんによるトークセッション（トークセッションの詳細は 6 ページから）

町の国際交流を振り返るスライドを上映

辻宏記念奨学金の創設

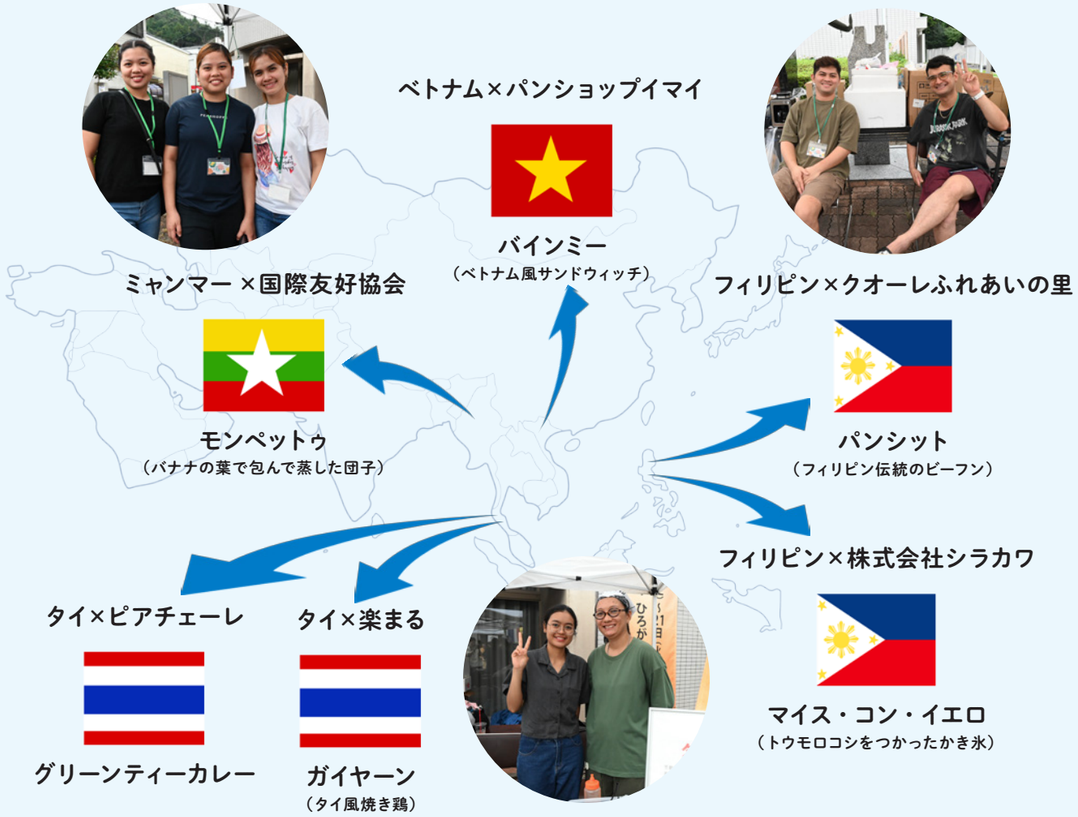
国際的な視野を持ち地域社会に貢献できる人材の育成を目的に、海外留学を支援します。国際経験を持った人材が、将来この町の担い手となり、国際交流や地域活性化、多文化共生に関わってくれることを目指しています。

「辻宏記念奨学金」の創設を発表する鈴木会長

国際交流フードフェス

式典同日、会場の外では「国際交流フードフェス」が開催されました。

会場では、町内在住の外国人が飲食店の方々と協力し、母国の郷土料理を販売。4 か国の料理やスイーツ計 6 種が出店されました。多くの町民が来場し、趣向を凝らした各国の味を堪能しました。



白川町国際友好協会設立40周年記念トークセッション

“音”で世界をつなぐ

～辻宏氏の志と白川町の国際交流～

話し手は、金澤正剛（まさかた）先生（国際基督教大学名誉教授・写真中央）と辻めぐみさん（故辻宏氏のご息女・写真右）、楽集館前館長で辻宏展を企画展示された井戸さえ子さん（写真左）を進行役に迎え開催しました。

井戸さえ子さん

皆様、こんにちは。只今より、白川町国際友好協会設立 40 周年記念トークセッション『“音” で世界をつなぐ』を開会いたします。

本日は、白川町にオルガン工房を構え、姉妹都市イタリア・ピストイア市との友好の礎を築いた故辻宏先生のご息女であり、元松本市音楽文化ホール・オルガニストの辻めぐみさん、そして交流開始当初から 40 年来、白川イタリアオルガン音楽アカデミーの講師として白川町とイタリアとの音楽交流に尽力いただいております音楽学者で国際基督教大学名誉教授の金澤正剛先生をお迎えしております。

本セッションは、辻宏先生がお亡くなりになってから今年で 20 年、国際友好協会設立 40 年を記念し、お二人の視点から、辻宏先生の人物像、音楽を通じた国際交流について語っていただきます。

過去を振り返りつつ、現在を見つめ、これからの未来に思いを馳せる、そうした時間を皆様と過ごしてまいりたいと思います。

■“音” で世界をつなぐ職人、辻宏先生の志

井戸さん

最初のトークテーマ「“音” で世界をつなぐ職人、辻宏先生の志」としまして、辻宏先生について、どのような方だったかを伺ってまいりたいと思います。

トークテーマについては、予めお二人にお伝えしておりましたところ、折しも辻先生の没後 20 年を記念し、ドイツのオルガニストで学者、ハラルド・フォーゲル氏から故人を偲ぶ追悼文がめぐみさんに届けられ、これが辻先生のオルガン建造家としての歩みを実に見事に書き著してあるので、ぜひ紹介してほしいとめぐみさん、金澤先生お二人からご依頼を受けました。これも辻先生のお引き合わせではないかと思わずにはおられません。

皆様にその全文をご紹介したいところではございますが、時間の都合上、短くまとめてご紹介させていただきます。

～フォーゲル氏の追悼文の要旨～

世界的オルガン建造家、辻宏氏は、二十世紀後半を代表する名匠の一人でした。

若き日にアメリカで学び、さらにオランダ、ドイツやがてイタリアやスペインの歴史的オルガンに直接触れる中で深い見識を培い、日本のオルガン文化に大きな足跡を残しました。

1976 年、東京都目黒区の聖パウロ教会に完成した辻オルガン、これは特筆すべき楽器です。北ドイツ・ブレーメン近郊に 18 世紀以来非常によく保存されたバロックオルガンの名器がありますが、これを辻氏がパイプの寸法や構造、鍵盤の技術的な構造、歴史的な調律法に至るまで忠実に再現して制作した楽器だからです。彼のこの作品は東アジア初の本格的な歴史的建造法で制作されたオルガンとして、高く評価されています。

やがて辻氏は、イタリア様式へと大きく関心を寄せました。声楽的で明瞭な響き、そして省スペースで現代の教会やホールに適合する設計が可能なところに強く魅了されたのです。彼はこの様式の特徴を活かし、シンプルな構造の中に豊かな歌心を宿すオルガンを生み出しました。

さらに 1990 年にはサラマンカ大聖堂においてイベリア様式の歴史的オルガンの修復を行いました。ヨーロッパ人以外の人で、スペインの歴史的オルガンの修復を成し遂げたのは、辻宏氏が初めてです。

晩年の彼は西洋の『均整美』と日本の伝統的な美意識との融合を探究し、それを達成しました。自分の作品である楽器に『個性、人格、性格』が宿ることを志し、将来にわたり独自の美しい響きを創り出した人でした。辻宏氏は、まさに世界に誇るオルガン建造家でありました。

と、賛辞をおくっていらっしゃいます。

フォーゲル氏は、ドイツのブレーメン芸術大学でオルガン科教授を務められ、ルネサンス及びバロック時代の鍵盤音楽の演奏法及び楽器研究の第一人者であり、世界各地で歴史的オルガンの修復や再現プロジェクトを数多く企画、監督した方でいらっしゃいます。

世界でも屈指のオルガニストでオルガン学者のフォーゲル先生をして、これほどの賛辞をおくられる偉大なお父様は、娘さんから見ると、どんなお父様でしたでしょうか。

辻めぐみさん

皆様こんにちは、本日は国際友好協会設立 40 周年誠におめでとうございます。お招きいただき、どうもありがとうございます。今日は金澤先生とご一緒させていただいて、恐縮に感じております。

ご質問にお答えする前に、皆さんに最初にお伝えしたいことがあります。亡くなった父と母は、白川町に暮らせてとても感謝いたしておりました。神奈川県からひょっこり現れたオルガンビルダーという得体の知れない者を温かく受け入れてくださって、そのおかげでこちらに来てからの 30 年間、仕事に打ち込む幸せな人生だったというふうに本人が申しておりましたのでお伝えしたいと思います。そして、父は白川に越して来てすぐの頃、私に「ここの人たちはすごい。本業の傍ら東座で立派に歌舞伎を演じる方があったり、普段は郵便局にお勤めしながら俳人として句集を出版している方や、書道とか邦楽、踊りの達人、そういう方がご近所にいっぱいいらっしゃる。ここは本当にすごい所だ。」と感じ入っておりました。今もよく覚えております。

1998 年辻オルガンの工房にて

今日はフォーゲル先生のようなご高名な方にあのような追悼文をお寄せいただいて大変ありがたいと思っております。あの方に巡り会って父のオルガンビルダーとしての人生が大きく展開したと思います。

ご質問をいただいた家での父は、家族から見ると普通のおじさんだったわけなんですけれども、父と母と明治20年30年生まれの父方の祖父母と私とで神奈川県に住んでおりまして、祖父母は息子がせっかく大学を卒業して、音楽の先生になったのに結婚した途端に辞めて、アメリカに行ってオルガンビルダーの修行をするって聞いた時に、普通の親は「そんなとんでもないことはやめろ」と止めると思うのですが、祖父母は「しっかりやれ」と言って応援したんです。変わっていると思うのですけれど、キリスト教の信者だったので、オルガンを作る人が日本にいて、教会に納めて神様の役に立つのは大変名誉なこと、ありがたいことだとそういう発想だったと思います。それで一生懸命応援しておりました。そして、父は息子としては優しい息子だったと思います。あと祖母は私の母のことを「この人は宏にとても必要な人だ」という風に直感的に思ったらしくて、大変大事にしてくれました。そういうふうな家族でした。

父は早く起きて一生懸命働いて、その代わりに土日は昭和の30年代から完全週休2日制にしたりして、メリハリをつけていました。休みの日や週末は、私と一緒にプールに行ってくれたり、自転車に乗ってくれたり、そういう普通のお父さんでした。

あとは、母のことは同志というか、二人三脚の相方として大事にして、一生そうやって2人で力を合わせて歩んできたんじゃないかと思います。お互いの一番の味方だったというふうに思います。

井戸さん

温かいご家族の中で、めぐみさんがお育ちになったということが伝わってまいりましたし、本当にご家族を大事にされるお父様だったのだなと思います。そして、奥様の紀子さんも辻先生を本当に支えられて、良いご両親のもとでお育ちになったということが伝わってまいりました。

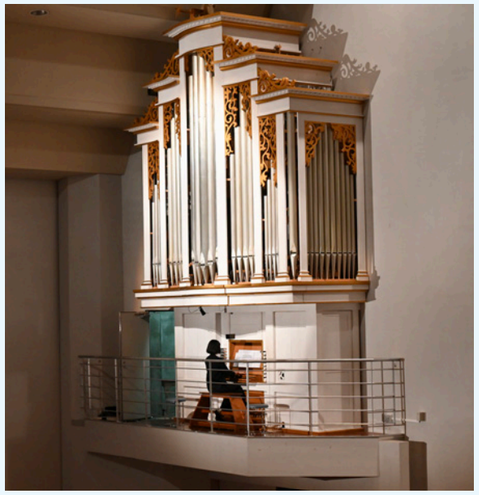
金澤先生は、辻先生と最初に出会われたときのご印象、オルガン建造家としての辻先生をずっと見つめてこられたと思いますが、どのように見ていらっしゃったのか教えていただけますか。

金澤正剛先生

最初の印象は、ちょっと覚えていないんですけれど、一言で言えばね、オルガンという楽器の歴史と伝統を、非常に興味を持って、それを学んで、それに従って、自分の音楽を追求しようという、そういうような熱意のある方だった。

そして、めぐみさんも言われたとおり、奥さんと二人三脚でね、それを進められた。ただオルガンを作るばかりではなく、オルガンの歴史を他の人にも知らせ、そして、自分ではそれに基づいて自分なりの楽器を作るという目的を持っていた方でしたね。

先ほどフォーゲルが言ったように、まずドイツ、北ドイツそれからイタリア、スペインの伝統を身に付けて、そしていよいよこれから自分なりのオルガンの音を生み出そうという風に始められた時に亡くなられてしまった。もっと長生きしていただいて辻オルガンのもっと深みのある素晴らしい楽器ができたはずなんです。それが僕は非常に残念に思っています。



井戸さん

辻先生は生涯に81台のオルガンを制作されましたが、それでも辻先生のお仕事としては、まだまだこれからだったというお話に感じるところがございました。

フォーゲル先生の追悼文を読ませていただきましたが、本当にすばらしい内容でございました。金澤先生は、この追悼文をどのように受け止めておられますか。

金澤先生

まさに、先ほどおっしゃったとおりだと思います、本当にそのとおりだと。特に晩年の辻さんのことを「西洋の均整美と日本の伝統的な美意識との融合を探究し、それを達成した」ここのところが非常に重大ですね。そして、自分の考えをそこに取り入れて、例えば先ほど岡崎さん（写真）が弾いてくださった一つ一つの曲に違った音色、特に2曲目の非常に静かな音色、深みのある永遠に続くような静けさを持った音色、あれは辻さんでなくては出てこない音だと思います。

井戸さん

辻先生はもうお亡くなりになっていますが、辻先生が作り出された音は生き続けるということを、今の先生のお話から感じたところです。

辻先生の人物像については、まだまだお聞きしたいことがございますが、辻先生をご存知ではない方にも、どのような方だったか大体お伝えできたのではないでしょうか。

■パイプオルガンが拓いた白川町の世界

井戸さん

では次は、「パイプオルガンが拓いた白川町の世界」をテーマに、音楽を通じた国際交流の始まりについてお伺いしていきたいと思います。

白川町でイタリアオルガン音楽アカデミーが始まった経緯や、当時の様子について教えていただけますでしょうか。

金澤先生

アカデミーが始まったのは当然の成り行きだったと思います。

辻先生に初めて会ったのは、ハーバード大学の博士号を得て帰国後間も無く、おそらく1967年の春頃、アメリカ・ボストン時代に非常に親しくしていた林佑子さんに「この方はこれから日本で非常に大事な方になるから、よろしくね。」とご紹介いただきました。

その後、ちょうど辻さんは東京の飯田橋に近い日本ルーテル教会のオルガンを手掛けていて、そこへみんなで行き、話を聞いたり、ディスカッションした覚えがあります。終わると飯田橋の飲み屋で二次会をしたりして、これがだんだんと大きくなって、後に今の日本オルガン研究会につながる基になったと思いますね。

そういうようなことがあった後、私が勤めていた国際基督教大学の教会堂にオーストリア・リーガ社のオルガンが入ることになり、日本側からの協力者として辻さんが手伝ってくださって、お付き合いが進みました。完成後も、演奏者を紹介してくださったりして交友が続きました。

その後も、辻夫人が主に企画された愛好者を集めてヨーロッパのオルガンを見に来るという時に、ちょうど私がイタリアにいましたので、お手伝いをしました。

1985年に「今度は黒川の辻オルガンで、ヨーロッパでやるようなアカデミーをやるから来てくれないか」と言われたので、「はい」と言って来た、それが始まりですね。自然にその道が開けたと思っています。

井戸さん

岐阜の山間の小さな町で行われる、それまで国内で聞いたことのないようなオルガン講習会の講師を依頼されたときは、どのように思われましたか。当時の率直な感想をお聞かせいただけますか。

金澤先生

初めて来たときに、ちょっとびっくりしました。白川口駅からバスでだんだんと山の中に入って行って、日が暮れてきて真っ暗になり、先が見えなくなってどうなることかと思っていたら、黒川に着きました。

黒川に着いた時は、自然の中の素晴らしい環境だと思い、このような行事をするには、もってこいの場所だなと感じました。

井戸さん

辻先生がじっくりパイプオルガンの音色を追求するには、抜群の環境だったということでしょうね。

1985年に辻オルガンで開催された第1回アカデミーの様子

金澤先生

そうですね。オルガンは、自然の音となじむ性格があるのだろうと思います。ある意味では、人間の声の代わりでもある。ですから、自然となじむ楽器として、この白川町というところに活動の中心ができたというのは、まさにうってつけであったと私は思っています。

めぐみさん

岐阜県美術館にイタリア様式のオルガンを辻オルガンが作るにあたっては、色々な白川町の方が署名を集めて県知事にお願いするなど、大きな協力をしてくださいました。そして、地元の木を使ってイタリアのピストイアのオルガンの複製が岐阜県美術館にできました。1984年のことです。

ただ、その頃の日本では、どこの音楽大学でもイタリアバロックの曲の演奏法をきちんと教えていませんでした。なぜなら大学の先生方でも習ったことがなかったからです。せっかくイタリアバロックのオルガンの複製が納められても、日本にちゃんと弾ける人が、まだほとんどいなかったのです。

当時の白川町長の鈴村冨郎さんがそれを聞いて、お披露目の時に岐阜県美術館に駆け付けてくださったピストイア市長さんたち一行とピネスキー先生と、せっかくオルガンができたのだから弾ける人を日本に育てなくてはいけないという話になり、「それなら白川町でまずは始めましょう」ということになったようです。
それで日本で初めてイタリアのオルガン音楽をきちんと系統立てて学ぶ場所ができました。それがきっかけです。それが 40 年も続いているのですが、日本中でこんなに長く続いているオルガンの講習会はありません。世界でも珍しいかもしれません。素晴らしいことだと思います。

東京の演奏家の間で、「岐阜っていうところはすごい。私たちのような者でさえ知らない本当に通好みのイタリアものを、岐阜では白川の講習会で習って、プロのオルガニストだけではなく、愛好家の人たちも弾きこなしている」という噂が何年か経ってから流れるようになりました。今では日本の音楽家の方たち、音大でも習えるような時代になりましたが、非常に先駆的だったわけです。

井戸さん

アカデミーのきっかけとなる本当に貴重なお話を伺いました。そもそも、ピストイアとつながるきっかけになったのが、やはりピストイアの古いオルガンの修復ということであったと思います。そのピストイアの修復プロジェクトの経緯とか舞台裏とか、きっと辻先生も紀子夫人もご夫婦ともご苦労が色々あったと思いますけれど、何かそうしたエピソードは聞いておられますか。

めぐみさん

ピストイアのオルガンを修復した時は、夏でした。非常に暑い夏で、イタリアの人は午後の一番暑い時間はお昼寝をするわけです。そして夕方からまた夜まで働くんですけども、父たちは宿舎が修復した教会から離れていたので、一旦帰ってお昼寝するということができなくて、本当にカンカン照りの暑い夏のイタリアで、お昼寝なしで一生懸命働いて、身も心も限界ぐらいへとへとになりながらがんばりました。

また、日本人にそんな大事な楽器を修復させるということで、ピネスキー先生は「辻宏は大丈夫、できるから。色々オルガンを作ったのを自分も見て聞いているから腕は確かだから。」と言って推薦してくださったのですが、イタリアオルガン界の大御所タリアヴィーニ先生という大先生が非常に心配なさって、「変な人にさせるぐらいなら壊れたままとっておいた方がいい」と初めは反対していらっしゃいました。それは当然のお考えで、ましてや日本から来るということですからなおさらです。

それでも色々な経緯を経て、父が修復させていただけることになって、そして完成してお披露目の演奏会の時は、父は本当に緊張していたわけです。まあ、裁判で判決がくだる囚人じゃないですけれど、さあどういう風に評価されるのか。オルガニストの方が披露演奏なさって、演奏会が終わっても、父はまだカチコチになって目をつむって座り尽くしていたんです。そうしたら、タリアヴィーニ大先生が歩み寄っていらして、母がそれを見て肘でつついて目を開けるよう父に合図して、そしたらタリアヴィーニ先生が父に握手の手を差し出して「おめでとう」と言ってくださいました。それはもう父にとって本当に胸がいっぱいになった瞬間だったと思います。

井戸さん

辻先生の実績の上に、姉妹都市としてのつながりがあるということを感じるお話をお聞きしました。

また、アカデミーを受講された方々が、今では各地、各分野でご活躍されているというお話を伺っております。白川町での講習会に今では講師として携わっておられる方もいらっしゃるということで、本当に音楽を通じて人を育てるという辻先生の志が形になっていると思います。アカデミーの開催のみならず「人を育てる」、「町への貢献」などについて、辻先生はどのようなお考えでいらっしゃったのでしょうか。

めぐみさん

白川町に引っ越してきた時、大変素晴らしい眺めの日当たりのいい広々とした元の黒川中（なか）小学校を借りすることができて、地元の方に何かお返しをしたいという思いを持っていました。

そんなこともあって、黒川中学校でリコーダーを課外活動でお教えしたり、あるいは黒川に知っている友人の演奏家の方々、国内の方も海外の方もお招きして、辻オルガンの２階の学校の元講堂だった部屋で演奏会をしていただいたりして、活気がありましたね。それから色々な演奏団体の合宿に使っていただいて、偉い先生にレッスンしていただいて、そういうことも何回もありました。そして終わりに演奏会を開いていただいて、黒川をはじめ白川町の色々なところから演奏会にいらしてくださって、賑やかな和やかな交流があったと思います。

井戸さん

私もその頃、初めて白川町に勤め始めた頃で、白川町はなんでこんなに海外から音楽の演奏家の方たちが次から次にいらっしゃるのかと思っておりましたけれども、その背景に国際交流にご尽力された方の力があったのだと改めて感じます。

めぐみさん

１つ言い忘れたのですけれど、小澤征爾さんが桐朋学園の若者たちのアンサンブルを連れて、チェロの世界的名手のロストロポーヴィチさんがソリストで音楽キャラバンをなさったんですね。それが 1989 年のことでした。あれは本当にものすごく特別な夏でしたけれども、うちの両親は小澤征爾さんもロストロポーヴィチさんも個人的には存知上げなかったんです。でもある時、小澤征爾さんからコンタクトがあり、「日本の農村の田園地帯の静かなところで、マスコミとかそういうものが一切入らない、本当に地元の方が夕涼みがてら足を運んでくださるようなな音楽会をやりたい。ロストロポーヴィチが『全く無名の青年だった若き演奏家時代に、ロシアで教会の前の広場で弾いたりすると、村のお年寄りやら子供と手をついだお母さんやらが寄ってきて、しみじみ聞いてくれた、あれは忘れられない。ああいうのをやると、征爾、お前も音楽家冥利に尽きるぞ』って言われたけれど、（中国大陸で生まれ自分の田舎がないので）自分にはツテがなく、どうしたらいいかわからなくて、美智子妃殿下（当時）に相談したら、オルガンを作っている辻さんという人が白川町の緑豊かなところに住んでいて、お茶とヒノキが主な産業という静かなところだと聞くから、音楽関係者でもあるし、辻さんに聞いてみたらどうかと紹介してくださった。」と言うのです。

辻オルガン２階のホールにてロストロポーヴィチ（左から２人目）と小澤征爾（中央）

それでいきなり小澤征爾さんからコンタクトがあったんです。だからロストロポーヴィチが来たのも、小澤征爾が来たのも妃殿下（現上皇后陛下）のおかげです。

金澤先生

今の話は初めて聞きました。

めぐみさん

そうです。私がボケる前に皆さんにお伝えして後世に語りつないでいただきたいと思います。美智子妃殿下はなるべくカーテンの影に隠れてという風になさる方でしたので、長く公にしませんでしたけれども、上皇后様になられたし、もういいんじゃないかなと思ってご披露いたしました。

井戸さん

なかなか他ではお聞きできないお話でした。もともと、お箏とか大正琴とか尺八とか三味線とか、音楽に親しむ方が大勢いらっしゃって、私も白川町は文化的なところだとは感じておりましたが、これまでのお話をお聞きして、音楽を通じた文化交流が国際交流を促

進したということを改めて感じております。

■“音楽の町・白川” を次世代へ

井戸さん

辻先生が人を育て、交流を深め、そして国際間または時代を跨いでつなげようとされた思いを、これからどのように活かしていくか、どのように継承していくといいか、もしくはどうあってほしいかについて、お二人に伺ってまいりたいと思います。

金澤先生には、これまでの 40 年間ずっと白川町の音楽を通じた国際交流にご尽力され、本当に頭が下がる思いであります。この文化をどう受け継いでいくといいのか、先生はどう思われるでしょうか。

金澤先生

この白川という町が、日本の中でも非常にユニークな町だということを、まず自覚していただきたい。桧や茶などの素晴らしい自然に恵まれる一方、黒川の歌舞伎ほか芸能などの文化芸術も盛んです。そういう町であるということを、全国的に、できれば国際的に知ってもらいたいです。その素晴らしさを若い世代も自覚し、未来に向けて継承してもらいたい。文化的基盤が、この町にはあることを様々な手段を用いて広く知らせる努力が重要であり、その一つがオルガンであるとも言えます。この町はもっともっとよく知られるべき町だと思っています。それを期待しています。

井戸さん

「知られてこそ」ですね。若い世代に知ってもらうことも、継承の第 1 歩だと思いますし、“知らせる努力” それから良さの発信というのがますます必要だということを思う次第です。

それではめぐみさんは、お父様の志をこれからの世代にどのように伝えていかれたいでしょうか。

めぐみさん

父のこしらえたオルガンというのは、400 年ぐらい長持ちするようにできています。（ホールのオルガンを指さして）これもそうです。父は今残っている 400 年ぐらい前のオルガンをお手本に作っているので、それぐらい持つようになっていて、例えば化学的なボンドは使わず、ウサギの骨から作るニカワなどを使っています。アルミやプラスチックは使いません。それらは経年劣化して壊れると、工業製品ですから自分では同じようには作れないわけです。そうしたものを使わないから、長く 300 年 400 年は持つわけです。ただし、革製部品の経年劣化などの修理は、数十年に 1 度くらい必要です。オーバーホールや部分的な修理をその都度しなければなりません。その際に大事なのは、修理はしても改造はしないことです。オルガンは機械ではなく芸術作品なんです。茶道で使うお茶碗とか棗とか、あるいは絵画とかと同じように芸術作品なので、オリジナルに加工をしてはいけません。改造された楽器というものは、バイオリンやフルートでも価値が下がります。作った人が作ったままに残すというところに価値があって、それは他の芸術作品でも同じことで、皆さんお分かりと思うんですけれど、モナ・リザにサングラスをかけたりしたら価値が下がるわけです。これについて、父が自分の言葉で記しているところがあるので引用します。「修復作業とは、元に戻すことであって、決して改良する作業ではない。残念ながら 20 世紀ヨーロッパ各地で行われた修復は、改良の手を加えた場合があまりに多かった。このような行為は、歴史的遺産の破壊とも言うべきもので、今後あってはならないことである」辻宏の著書『オルガンは歌う』の一節です。改造をする人は、安易に、自分だったらここはもっとうまくできるから変えよう。多分辻さんが生きていてもＯＫを出すだろうと思いがちです。オルガニストの間で、辻オルガンの響きは「辻サウンド」と呼ばれています。その独特の辻宏の響きは改造されると失われて、二度と元には戻りません。

辻オルガンの寿命は、先ほど申し上げたように長く、現代のコンクリート建築よりも長いので、いつかは必ず建物の方が先にダメになってしまって、オルガンを解体して移設するという日が来ると思いますけれども、その際、あるいはその前でも後でも辻オルガンの加工や改造をしないこと、これは辻宏の一生のお願いです。これは申し上げておきたいと思います。

あとは、白川町に 4 台ある辻オルガンをこれからもたくさんの人が弾いたり聞いたり、一緒に歌ったり使っていただくのが良いと思います。アカデミーとか入門講座とかフォローアップ講座とか、そういうものも大変すばらしい企画だと思います。また、黒川中学校で何年か前まで、恵那から先生がいらっしゃってオルガンのレッスンが行われていましたが、もし可能なら再開したり、課外授業で習えるようにしたり、あるいは地元の白川町の方が大人でも定期的にレッスンを受けられるような社会人講座など、いろいろな活用ができたらいいなと思います。

井戸さん

ありがとうございます。金澤先生がおっしゃったように、音楽のまち白川町のオルガンを通した文化活動を広く知ってもらうための努力、それからめぐみさんがおっしゃったオルガンの更なる活用というのは、今後の課題になるのではないかなということを感じております。

金澤先生、音楽学の博士でいらっしゃる先生から見て、白川町の国際交流に音楽が果たした役割や成果のようなものをどのように捉えていらっしゃいますか。

金澤先生

それは大きいと思います。このイタリアのオルガン音楽というのが、一頃前までの日本では知られていなかった。それがだんだん今知られるようになったのも、偏にこの白川町の努力のおかげだと思うし、

めぐみさん

それは誇張ではなく本当にそうだと思います。

金澤先生

ということでね、この白川町が素晴らしい町であるってことは、もっと全国的に知ってもらいたいなと思う。それでどんどん若い人たちに戻ってきてもらって、このユニークな町がどんどん盛んになることを私は期待しております。

■若い人たちへのメッセージ

井戸さん

話題は尽きませんが、そろそろお時間となります。本日はお二人のお話から音楽という言葉を超えたつながりの力、そういうものを改めて辻先生の功績から感じることができました。そして辻先生がつないだ音と人の輪が 40 年経った今でも広がり生き続けているということに改めて本当に感動する次第です。

最後にお二人から町の皆さんへ、若い人たちに一言ずつメッセージをお願いしたいと思います。まずは、めぐみさんからお願いします。

めぐみさん

私の父は、もちろん人並みに苦労もあったわけですけれど、でも仕事を見ていると充実した幸せな人生だったと思うんです。白川町の若い人たちへ何かメッセージというご質問ですが、父の人生を振り返って思うことは、夢を持って、そして諦めずにコツコツ進むこと、自分の頭で考えること、他人の目を気にしないこと、でも独りよがりにならないように良い先生と良いお手本を探して、そして歩んでいくこと。それから色々な良い本を読むこと、そんなことを思いました。

金澤先生

もう色々言っちゃったんですけどね、ともかくも、この町の良さというものが一般的にもっとよく知られるようになること、そして、オルガンばかりではなく、ヒノキもお茶も自然もそして歌舞伎も、そういう人間が生み出した素晴らしいものを最も具体的に有効に活かしている町だということを分かってもらえば、またこの町ももっと盛んになるのではないかと、それを私は期待しています。

井戸さん

ありがとうございます。白川町がこれからも “世界とつながる町” として歩んでいけるよう、心から願っております。今日、お二人から伺った貴重なお話は、そのための示唆に富んでいたと思っております。
金澤正剛先生、辻めぐみさん、本日はありがとうございました。

白川町の国際交流 40 年

～音楽がつないだ縁、まちが育てた交流～

創成期	ピストイアとの交流開始	1984年（昭和 59年）	
		1985 年（昭和 60年）	第 1 回イタリアオルガン音楽アカデミー **白川町・ピストイア市友好協会設立**
	第 1 回青少年ピストイア市派遣 （2018年までほぼ隔年で15回実施）	1987年（昭和 62年）	
		1988年（昭和 63年）	美智子妃殿下(現上皇后陛下)、紀宮殿下がご視察
	ピストイア市と姉妹都市提携	1994年（平成 6 年）	
		1995年（平成 7 年）	**国際友好協会へ改称**
発展期	ピストイアから初の青少年親善使節 （2006年まで隔年で6回受入れ）	1996年（平成 8 年）	
		1999年（平成 11年）	中国松原市から初の青少年親善使節 （2011年まで隔年で5回受入れ）
	第 1 回青少年中国松原市派遣 （2012年まで隔年で5回実施）	2000年（平成 12年）	
		2004年（平成 16年）	ピストイア交流 20 周年
	在住外国人支援対策会議発足	2006年（平成 18年）	
		2014年（平成 26年）	ピストイア交流 30 周年
	協会設立 30 周年式典、県表彰受賞	2015年（平成 27年）	
展開期		2016年（平成 28年）	青少年ピストイア市派遣で佐見歌舞伎披露
	新型コロナウイルスの世界的流行	2020年（令和 2 年）	
		2021年（令和 3 年）	オルガンアカデミーのオンライン開催
	日中国交正常化 50 周年文化交流	2022年（令和 4 年）	
		2023年（令和 5 年）	在住外国人交流会
	姉妹都市提携 30 周年記念事業	2024年（令和 6 年）	
		2025年（令和 7 年）	**協会設立 40 周年** 国際フードフェス、海外留学奨学金制度創設

音楽を通じた交流

白川町の国際交流は、音楽をきっかけに始まりました。

オルガン建造家・辻宏さんの活動を通じてイタリア・ピストイア市との縁が結ばれ、パイプオルガンを核とした交流が展開されてきました。イタリアオルガン音楽アカデミーの開催や各種演奏会の開催など、音楽を通じた交流は、言葉や文化の違いを越えて人と人を結び、町の国際交流の礎となっています。

青少年の相互訪問

未来を担う世代の育成を目的に、青少年の相互訪問は長年にわたり継続され、異なる文化や生活に直接触れる機会を提供してきました。

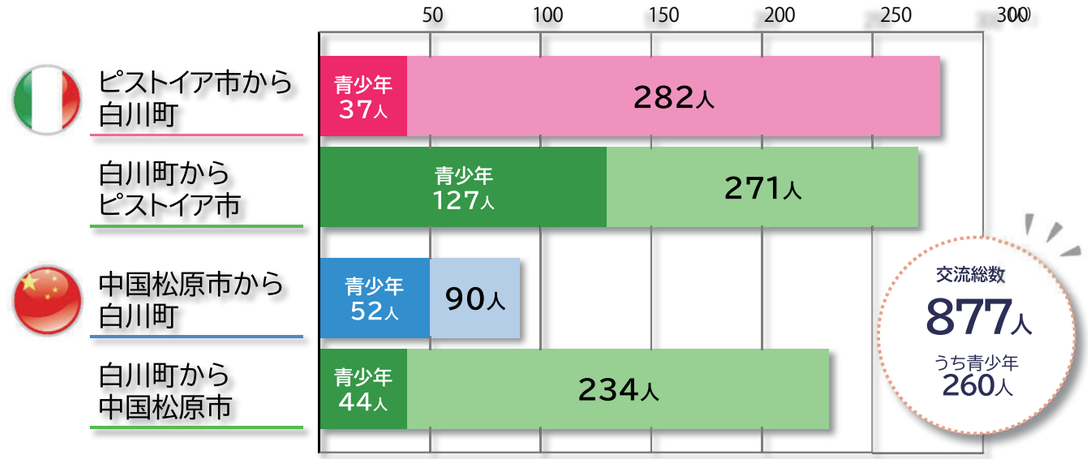
近年の世界情勢により派遣事業の実施が難しい中、当協会では、海外へ留学する若者を応援する奨学金制度を創設しました。国際社会で活躍できる人材を育成するとともに、交流の担い手を次世代へとつないでいます。

地域に根ざした多文化共生

海外との交流に加え、町内で暮らす外国人との関係づくりにも取り組んできました。技能実習生や研修生など、多様な背景を持つ人々が地域の一員として安心して生活できるよう、交流会や文化体験の機会を創出しています。

国際交流は「外へ広がるもの」から「地域の中で共に生きるもの」へと広がり、白川町らしい多文化共生のかたちが育まれています。

白川町と姉妹都市・友好都市との交流実績 （青少年は内数）



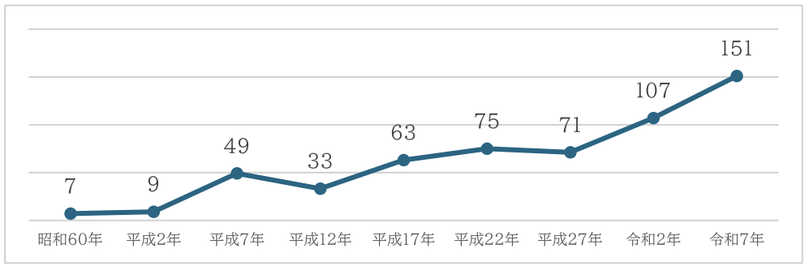
ピストイアからの**最多訪問者**は、オルガンアカデミー講師の**ピネスキー教授**。この 40 年で 36 回来町。
イタリア、中国以外の国との交流も含めると交流人数の総数は 1000 人を大きく超えます。

白川町と姉妹都市・友好都市との位置関係

ピストイア市
北緯 43 度 56 分
東経 10 度 55 分
フィレンツェの北西約33km
ピサの北東約47km

白川町
北緯 35 度 34 分
東経 137 度 11 分

白川町の外国人登録者数の推移 （各年4月1日人口）



年		町内外国人
昭和60年	(1985年)	7
平成2年	(1990年)	9
平成7年	(1995年)	49
平成12年	(2000年)	33
平成17年	(2005年)	63
平成22年	(2010年)	75
平成27年	(2015年)	71
令和2年	(2020年)	107
令和7年	(2025年)	151

白川町国際友好協会第 41 回通常総会及び臨時総会が開催されました

令和 7 年 5 月、白川町国際友好協会の第 41 回通常総会が書面表決により開催されました。この総会では、令和 6 年度の事業報告および収支決算、ならびに令和 7 年度の事業計画と収支予算案について審議され、いずれも承認されました。

また、同年 9 月 20 日（土）には白川町町民会館で臨時総会が行われ、「役員の改選」および「辻宏記念奨学金」に関する議案について、それぞれ承認を得る形となりました。

◆会員募集◆

協会は、国際化時代にふさわしい町・人づくりをめざしています。加入は随時受け付けていますので、ご協力いただける方は、協会事務局までご連絡ください。

一人でも多くの皆さんにご理解をいただき、活動の充実を図っていきたいと考えていますので、ご協力をお願いします。

◇会員の状況◇

2026.3 月現在

地区名	個人会員	団体会員	計
白川	44	14	58
蘇原	28	2	30
黒川	25	6	31
佐見	18	2	20
町外	10	2	12
計	125	26	151

編集・発行 / 白川町国際友好協会　　事務局 / 岐阜県加茂郡白川町河岐 1705-2　☎70-1316